

◎ 連合会だより

3月というのは、ひとつの区切りで、1年前に産声を上げた建設労働者協同組合も1年の決算を迎えた。1年前の3月22日、イタリアからANCP Lの代表を迎えての設立準備総会、ゼネコン主導の復興を許さず、住民が主人公のまちづくりをめざして、事業協同組合方式ではなく、働く者の建設協同づくりに着手した。

1年目の結果は、解体から新築、大修繕・改築へと仕事の内容が変化し、4億弱の事業高となった。この1年間の建設労働者協同組合への期待は、大変大きく、1年目にして、東京事務所の開設、全国一本の組織化へ関西での広がりの展望が見え始めてきている。

労働者協同組合、高齢者協同組合への社会的期待の急速な高まりは、全国民的課題とわれわれの歩みの照準が合ってきたということであろう。

建設労働者協同組合に参加した小野寺氏は、埼

玉の高砂建設の常務をしていた人だが、高砂建設自身が、労働者協同組合との出会いの中で、住民のための環境を大切にしたい住宅政策の必要性などを考え始めたり、大手ゼネコンを飛び出して自分のやりたいことは建設労働者協同組合でないとできないという参加してきた技術者がでてきていることは、社会経済活動に携わる一人ひとりが、その社会的意味について考え始めているということであろう。

多くの人々が求め始めている人と地域のための仕事おこし、労働者協同組合は、多くの人々が共存する結集軸として、昨年、生命・労働・地域の再生、非営利・協同の大連合というテーマを提起したが、それをさらに発展させ、人=生命、地域、環境を重視する社会経済連合というテーマを設定したいと考え始めた。次期総会にて提案したい。

鍛谷 宗孝 (労協連合会・専務理事)

◎ センター事業団だより

桜満開の4月。新たな年度の到来と共に、今年も希望と不安を胸一杯に新卒の事務局員候補たち14名が労協での人生を開始した。4月1日の入団式にはじまり、2～4日の第1回研修会、協同の学習会、5日の全国所長会議と、頭が真白になったり真赤に染まったりのあわただしい1週間を終え、各事業所で働きはじめた。組織の中も、若い新しい顔ぶれに刺激され、心機一転の機運がふくれる。特に今年は、3月で何人かの事務局員が退職し、辛い別れを味わったがゆえに、何か緊張感と共に、うっ屈したふん囲気も一方で感じる。若手の育つ力をどう引き出し、尊重するのか、大きなこの命題の答えは容易ではない。しかし、はじめて一年次研修を経験して見て、霧の一端が晴れる思いがした。多くの先輩の経験、社会の動向を目一杯聞き、同感する表情を見て、10年前の自分を思い返す。何が自分の10年間を支えてきたのか? けっして一つでない答えに思いふける中で、「自己形成」と「自己認識」という言葉に当たっ

た。「労協とは何なのか」「何を指すのか」ということが繰り返される中で、基盤としての社会認識・時代認識と己は何なのか、何を為すのか、を固めることなくして、この運動、組織のけん引者となりえない気がする。

では、一般の営利企業を経験しない人々にとって、何が社会の矛盾や課題を認識する実感となるのか、日々の学習の努力はもちろんだが、様々な内外の人々の生きざまを知り、語り合う中でこそ、実感は形成されていく様に思う。人を通して社会を認識する、ということであろう。ともかくも労協の事業運動のけん引者は、社会変革の担い手としての存在意義がある様に思う。この自覚をどう形成するのかが、実は大元の課題なのだ。

出会いと別れの交錯する春、1年の四季の実感と共に、人生の四季を思い、今一度、己の存在と価値を見つめ返してみたい。生きることの営み全てが、人間そのものの味わいを深めていける様に…。古村 伸宏 (労協センター事業団・事務局長)